

『おもろさうし』の係り結び

博士前期課程一年 間宮厚司

琉球の古文獻『おもろさうし』に日本古典語の係り結びと類似した現象があることは、伊波普猷の「琉球語の掛結に就いて」で既に指摘されていた。しかし、その係り結びの現象を秩序立てて整理分類し、日本古典語の係り結びと比較対照し、体系的にまとめあげた研究はなかった。そこで私は、『校本おもろさうし』を用いて調査を行ない次のような結果を得た。以下、簡条書きにて記してみる。

(1) 結びを連体形にし、文を強調する日本古典語助詞「ぞ」に相当する助詞は、『おもろさうし』には表記上、「と」「よ」「る」「ろ」と四種類（これらを一括する場合は「du」と書く）ある。

△実際の音価▽「と」「よ」「る」「ろ」は「[du]」「[ro]」の転化した音「[u]」であったと考えられる。

△用法▽「du」の結びを置いて分類すると次のようになる。

① 「体言(B)」「du」、体言(A)「(Bナリ、Aハ)」

② 「……」du「……動詞連体形」

③ 「……」du「……動詞連用形+居る」

④ 「……」du「……形容詞語幹+しや(造名詞接尾辞)+有る」

⑤ 「……」du「……形容詞連用形+有る」

①は、「体言(A)」、体言(B)「du」という順直な表現の倒置による強調表現である。この場合の「du」は、『萬葉集』の「うまし国そあきつ島大和の国は」の「そ」と同様、強く指示・指定する意を表わす。②は、①の表現形式が発展した用法で、体言の資格を持つ連体形が「du」の結びとなっている。ここまでは日本語の係り結びが歩んで来た道と軌を一にする。ところが③は、「du」の結びに補助助詞の連体形「居る」が来ている。「居る」はラ変型活用なので、終止形は「居り」で連体形と活用上の区別が明瞭となる。それは④⑤の「有る」を活用した形容詞の結びの場合も同じである。それ故、琉球方言では、現在も係り結びの語法を忠実に保ち続けている。

(2) 結びを已然形にし、文を強調する日本古典語助詞「こそ」に当たる助詞は、『おもろさうし』に「す」「しゆ」「しよ」「じよ」「ぢよ」「ぢよ」と表記上六種類（一括する時は「su」と書く）ある。△実際の音価▽本来の形は「[su]」である。ただし、先行母音が「i」の場合には、「[si]」「[si:]」と口蓋化を起こしている。

△用法▽「su」↓已然形は、上接語を特示強調する単純強調である。なお、『おもろさうし』に見られる「su」↓已然形の係り結びは、現代琉球方言では既に消滅しており、観察は不可能である。

(3) 「du」↓連体形」と「su」↓已然形」の表現上の違いについて。「du」を用いた表現は、事柄を客観的に捉えて論理的に強調する例が多数を占める。それに対して、「su」を用いた表現は、事態を主観的に捉え、「su」の上に来るものを選びすぎて感情的に強調する場合が多い。そしてこの事実は、日本古典語の「ぞ」が事柄を論理的に、「こそ」が感情的に強調する場合に用いられるという一般的な傾向と相応じているのである。